

# ジャーナリズムと「近接性の法則」

## —その逆説的効果からの考察—

伊藤 英一\*

- 1、「近接性の法則」とは？ ～身近な情報とは何だろうか？～
- 2、中等教育で学ぶ「近接性の法則」
- 3、ジャーナリズム高等学校で学ぶ「近接性の法則」
- 4、「近接性の法則」とその逆説的効果 ～新聞の信頼性への期待に見る～
- 5、「近接性の法則」の壁を越えて ～特派員報告から～
- 6、「近接性の法則」と視座の設定 ～いちばん下から見てみよう～

「サツ回り」という懐かしい言葉がある。サツ回りとは、ジャーナリストが現場の一つであるサツ（警察）を足で回って取材し、聞き出した情報を報道することをいう。聞き出すと簡単に言うが、守秘義務を負ったところから情報を得ることは至難だ。高いハードルがある現場だからこそ、ここから新人記者の多くが取材という試練の場への挑戦によってスタートを切り、ジャーナリズムの基本を実地で学んだのである。懐かしいとの形容詞を付けたのは、そんな時代が、徐々に霧の彼方に消えて行きそうだからだ。

それでもなお、サツ回りは記者養成のOJTとして、基本中の基本だと考える心強い向きもあるのは確かだ。また、新人の職務としてだけでなくベテラン記者となってもなお、その天職としての神髄は、このサツ回りに代表される現場重視にあるとする頼もしい職業人も健在で、このような人材が日本あるいは世界のメディアを支えている側面もうかがえる。

新聞をはじめとした既存メディアの危機が叫ばれて久しい今日。記者の書くネタは、足で稼ぐよりも、インターネットを介して蒐集し、ジャーナリストの仕事はデスクワークで十分と豪語する向きもあるのは事実である。確かに、みんなが誰でも情報の発信者になれる時代に、みんなから発信される情報を注視し、そこから得られる情報を総合・解析・分析して伝えるべき情報を抽出するという仕事も素晴らしからう。しかし、厳しい時間的制約の中で奮闘するジャーナリストとして、編集能力に磨きをかけることもさることながら、その時間的制約を超克する能力が、第一線の現場に立ってこそ磨かれるのも事実のように考えられる。みんながジャーナリストとなりえる時代に、みんなと伍してなお傑出した観察力、洞察力、探究力、調査能力を身につけるためにも現場に出掛けることが必要で、フィールドに立って磨き上げられる経験を積むことこそがプロフェッショナルとして生き抜く上で重要なのだ。

ジャーナリストの将来も決して楽観視はできない時代ではあるが、ジャーナリズムの世界で働くことに魅力を感じて、この職業を志望する学生は依然として多い。例えば、フランスでは14校に<sup>(1)</sup>

---

\*いとう えいいち 元日本大学法学部新聞学科 教授

上る公認のジャーナリズム高等学校があり、ジャーナリストの約2割を輩出している。教育対象は、日本の大学制度になぞらえれば、4年次生から大学院1年次生（修士／博士前期課程1年）であり、まさに日本のメディアで新入社員がOJT等で奮闘している頃にあたる。パリ・ジャーナリスト養成センター（Centre de Formation des Journalistes : CFJ Paris）、リール・ジャーナリズム高等学校（Ecole Supérieure de Journalisme de Lille : ESJ）、政治学院ジャーナリズム高等学校（Ecole de journalisme de Sciences Po）等、いずれも入学試験倍率が10倍前後を推移している難関校となっている。大学学部レベルで社会科学や自然科学の履修を終えた志望者の中から、学部時の成績と筆記試験の結果を踏まえた上で、モチベーションに重きを置いた面接試験を通過した少数精鋭を対象に実践的な教育訓練を課している。

サツ回りを重視して来た日本のメディアは、取材現場での経験の積み重ねがジャーナリストとして大成する礎になると考えて来た。メディア産業に限らず、日本の企業では様々な現場の経験を重視し、そこから積み上げられる総合的な理解力や判断力を経営上で大切だと判断して来たケースが多々見受けられた。しかし、このような人材育成の方法は、生涯にわたって一つの組織に奉職し続けることを暗黙に了解してこそ成り立つものである。今では遠い過去の物語にすらなってしまった話なのかも知れない。しかし、現場経験が重要で、人材育成の基礎であるという事実が消えてしまったわけではない。

現場経験を重視し、独立心旺盛なジャーナリスト育成に挑んできたフランスのジャーナリズム教育は、日本のメディア教育にとり検証してみる価値はあるように思われる。

フランスの産業界は国家との距離が近く、エリート主義と現場軽視の弊害が目立つ。これと対峙してチェック機能を発揮できる独立性の高いジャーナリストは、どのように育てられているのか。本稿では、フランスのメディア教育の初期段階で取り上げられる「近接性の法則」に焦点を絞って、「近接性の法則」の定義、教育内容、その法則がジャーナリズムでどのように生かされ、あるいは超克されているのかを検討しながら、むしろ「近接性の法則」の逆説的效果こそ期待されているのではないかを考察してみたい。

### 1、「近接性の法則」とは？ ～身近な情報とは何だろうか？～

情報への関心は、個々の読者や視聴者にとって、自分に近い情報であるほど高くなる。ジャーナリズムの世界では、この単純な経験則を「近接性の法則（la loi de proximité）」と呼び、この法則を念頭において報道や制作に勤しむことが求められる。ここでは、余り耳慣れないような「近接性」との訳語を使ってみたが、フランス語の *proximité*（プロクシィミテ）とはラテン語の *proximitas* から由来する単語で、「誰か、あるいは何かの、すぐ傍／至近の距離にある者や物<sup>(2)</sup>」を指す。自分の住む街や御近所の御隣さん方とかを意味するような単語である。要するに、「近接性の法則（la loi de proximité）」とは、情報の受け手にとって、すぐ傍や最も近くで生起する情報ほど重要性が高く、その重要性は情報の受け手から隔たるに従って逡減するとの法則である。

もっとも、このプロクシィミテという言葉からフランス人が受ける感覚は変化しているようだ。パリ政治学院の政治研究センター（CEVIPOF<sup>(3)</sup>）は、2009年から毎年行っている政治信頼度調査の一環として、4年前からプロクシィミテを調査対象に追加、「あなたが身近に帰属していると感じる地理的範囲はどこですか<sup>(5)</sup>」との質問をフランスの有権者に行っている。2018年1月に発表され

た調査の中で第1位になったのはフランスという国レベルの拡がりを身近とするもので40%と前年比プラス1%だった。第2位は住んでいる町やカントン（州/郡）で21%と前年比マイナス1%、第3位には県/州/地方で17%と前年比マイナス3%となっている。続いて、第4位となったのが世界全体との回答で12%と前年比プラス1%、最下位の第5位はヨーロッパで前年同様の7%となった。

住んでいる町やカントンを身近なものを選択した層は、2014年末では、26%であったものが、2018年には21%まで落ち込んだのだ。フランスでは、地方分権化の動きに併せて、地方テレビを強化し、身近な医療施設や地域警察を普及させる試みの中で、プロクシミテを地方回帰のスローガンとして盛んに用いてきた。

しかし、プロクシミテを身近に感じる先としては、むしろ国や世界へと拡がってきているようだ。フランスという国のレベルに親近感を示すものが2014年末の36%から2018年初の40%に伸び、世界全体とするものが9%から12%となったのだ。一体感を抱く先が世界であるとする中には意思的なものも含まれるのかも知れないが、プロクシミテが国や世界に拡大する傾向の中で、逆にヨーロッパを身近に感じる層が7%前後の低い水準で推移していることは要注意であろう。

「近接性の法則 (la loi de proximité)」そのものの話に戻ろう。「情報の受け手にとって、すぐ傍や最も近くで生起する情報ほど重要性が高く、その重要性は情報の受け手から隔たるに従って逡減する」とのことであった。従って、情報の受け手にとって近いものを念頭にジャーナリストは仕事をする必要がある、とされるのである。しかし、先に参照した調査結果から推察できることは、人々が隣近所や町よりも国を最も身近な範囲と捉えていることで、決して「近接性の法則」に述べられているようではない可能性もあることだ。また、国レベルを最も近接する地点に置き替えたとしても、情報の受け手にとっての情報の価値を推測することはなかなかの難問である。

サウジアラビア人記者ジャマル・カシヨギ氏がトルコ・イスタンブールのサウジ総領事館で2018年10月2日に殺害された事件に関するニュースは各国のメディアで大きく取り上げられており、読者や視聴者の反応も旺盛だ。一方、このサウジアラビアが軍事介入することにより、数万人が死傷、200万人以上の難民が生まれ、数百万の子供たちが飢餓に苦しんでいる<sup>(6)</sup>イエメンでの悲惨な状況に関するニュースはどうだろうか。地理的距離や時間的な要素は殆ど同じである。しかし、犠牲者の人数等は圧倒的に多いにもかかわらず、メディア上の情報は、量的にも逆転しているようにも見受けられる。人の命は平等に尊いとされているにもかかわらずだ。本当に距離が決定的ならば、距離がほぼ同じで犠牲者は圧倒的に多いイエメンの方が遥かに関心と呼ばなければならないのではと、俄かには釈然とはしないところがある。

また、今から3年程前になるが、フランスのパリで、2015年11月13日（金曜日）夕刻から深夜にかけて起きたテロによる連続銃撃爆発事件があり、130名の命が失われ、350名が負傷した。その前日、2015年11月12日（木曜日）、レバノンのベイルートでテロ攻撃があり、死者44名、負傷者230名であった。この2か所での事件について思い起こしてみても、パリの事件の方が犠牲者の規模やそのインパクトが大きかったのは確かにしても、メディアの取り扱い、各国での国際的な反響もパリでの事件に傾き過ぎていたような面も見受けられた。

このように釈然としないところもある「近接性の法則」ではあるが、これがどのように中等教育で取り上げられているかを、次に見てみよう。

## 2、中等教育で学ぶ「近接性の法則」

情報メディアやジャーナリズムに関する教育を初等あるいは中等教育の段階から導入しようとする動きが熱意をもって推進されている。

フランス・テレビ (France Télévision) が2015年、中等教育用に共同制作したビデオ教材に、「近接性の法則 (la loi de proximité)<sup>(8)</sup>」と題するものがある。日本の教育課程では中学2年に相当するコレッジ第4級 (Collège Quatrième Cycle) での情報メディア用の教材作品である。粘土細工の人形アニメーション番組で、2分11秒の短いものであり、中学生が視聴した上で、クラスみんなで意見交換するには面白い題材となっているので、その粗筋を追ってみよう。

ある町の中学校。放課後、下校準備をしていると、外で大きな物音。クラスのみんが、窓に駆け寄って、広場を見下ろす。ブレーキの故障した古く大きなポンコツ車と、きれいなセダンがぶつかって、ペチャンコになっていた。広場も、学校の窓にも人だかり。

翌朝のクラスでは、地方新聞に大きく掲載された事故のニュースで話題沸騰。その紙面の片隅には、ポーランドでの交通事故で20名死亡と、たった一行の記事。これに気付いたカメル君は、「死傷者ゼロのニュースに一ページを割いて、20名の死亡事故に一行なんて、嫌な感じだし、考え直さなきゃ駄目なんじゃないか」と発言。クラスのみんが白けてしまった。カメル君は一人ぼっち。

近くのことには興味が湧いても、遠くの話には関心が行かない。憎ったらしい、けれど避けて通ることもできない、メディアの世界を牛耳っている「近接性の法則」をカメル君は発見したのかも。

メディアの役割は、みんなが興味を示すニュースを伝えることは勿論だが、もっと広い世界から見ること大事と気付かせることにあるのでは。実は、クラスのみんが家族の中にも、事故の原因だったブレーキの工場に働いている人も多く、その製品は世界中に輸出されて町の経済を支えているそう。

みんなが興味をもってくれないと、無視されてしまうニュース。けれど、クラスのみんがから孤立した少数意見でも、まっとうなのかも知れないと考えさせている。一方、事故の原因となった車のブレーキは、みんなの家族の多くが働いている工場の製品で、世界に輸出されている。ブレーキの信頼性にも影響しかねないから、みんなが騒ぐのも当然で案外無視はできないのかもと類推させている。

『憎ったらしい (détestable)、けれど避けて通ることもできない (incontournable)、メディアの世界を牛耳っている「近接性の法則」』、と少々厳しい表現を使って、孤立したカメル君に幾分か味方するようでもあり、みんなが自発的に読んでくれないメディアだと困るしねと示唆するようでもある。

カメル君に与する<sup>(9)</sup>か、大勢の方につくかもさることながら、憎いだけで済むのかどうか、本当に避けて通れない法則なのか等、中学生が考えて議論するには良い教材となっている。ニュースの条件として、興味深いというだけでなく、正確、迅速、完全、簡潔である必要があるが、鳥瞰的な視点から、みんなに役立つ情報を送り届ける役割をメディアは担っていることを学ばせようとしている点も心強い。

### 3、ジャーナリズム高等学校で学ぶ「近接性の法則」

大学学部レベルで一定の社会科学や自然科学を学んだ学生に対し、メディア業界でのプロフェッショナルとなる人材を育てる役割を担っているジャーナリズム高等学校では、この「近接性の法則」を、どのように教えているのだろうか。

読者層からの近さを測る尺度として、リール・ジャーナリズム高等学校<sup>(10)</sup>では、先ず読者や視聴者を中心におき、その中心から同心円状に四方に拡がる下記の4つの軸に沿った視点から考察するよう学生に講義している。

- ① 地理的 (géographique)
- ② 時間的 (temporel)
- ③ 感情的 (affectif)
- ④ 社会的・職業的 (socioprofessionnel)

これら4つの軸に沿って考えてみる。例えば②の時間的な軸ならば過去あるいは未来に向け中心から身近な時である今、そして明日または昨日、と情報の重要性は低下して行く。①の地理的な距離は、住所、職場、故郷等から離れるに従って情報価値が下がることから、「距離的死の法則 (la loi du mort-kilométrique)」とも呼ばれている。ネットやウェブの時代、地球的な規模で情報伝達上の距離の隔たりが解消され、距離の死とも呼ばれたこともあるが、物理的距離は依然として情報価値に影響しているのだ。

ここで注意しておかなければいけないことは、中心に置かれた読者や視聴者は、単数であることだ。エゴ、あるいは個々の自己が想定されていることである。報道する側の、記者やプロデューサーは、その時々割り当てられた、あるいは、各自の理想とする、立場や視点から、多くのエゴとしての読者や視聴者にニュースを伝える職務を遂行することとなる。

このニュースがニュースであるためには、既に中等教育での説明の段階で触れたように正確、迅速、完璧、簡潔、かつ受け手にとって興味深いもの、でなければならない。特に、この最後の「受け手にとって興味深い」ニュースとして受け入れられるには「近接性の法則 (la loi de proximité)」を勘案する必要があると考えられる。ただし、ニュースの送り手であるジャーナリスト自身の視点や取材対象は、受け手からは遥か彼方の遠くや過去・未来にあることもある。仮に受け手に近接したところで取材したニュースや題材も、場合によっては世界中の人々を受け手として考慮する必要が生じて来ることもある。従って、ジャーナリズム高等学校で教えられる学生にとって肝要なことは、自身の視点をいずれかに定めながらも、受け手のニーズをどのように満たして行くかということになる。

これら4つの軸に、更に2つの要素を加えて、計6つの軸から、近接性の法則の視点を定めるように講義したのが、西フランス紙 (Ouest-France) やル・モンド紙 (Le Monde) の編集長を務めたイヴ・アニェス (Yves Agnès) だ。

彼の手になるジャーナリズム教本 (Manuel de journalisme) では、次の6つの尺度から、近接性の法則による情報の価値を考えることが必要と提示されている。<sup>(12)</sup>

- ① ニュース性 (L'actualité)
- ② 本能 (Les grands instincts)
- ③ 地理 (La géographie)

- ④ 社会的・職業的集団 (Le groupe socio-professionnel)
- ⑤ 社会的・文化的帰属 (L'appartenance socio-culturelle)
- ⑥ 日常生活 (La vie quotidienne)

先ず①にニュース性 (L'actualité) が挙げられている。ジャーナリズムの扱う情報の重要性を考えるのにニュース性を、近接性の尺度として挙げるのは当然と言えば当然で、逆に異様に思われるかも知れない。しかし、あるメディアから流されたニュースが他のメディア全般を介してニュースを更に増幅して行くという傾向がある。「情報の循環的伝播 (circulation circulaire de l'information)<sup>(13)</sup>」とピエール・ブルデュー (Pierre Bourdieu) が表現したような現象である。そんなニュースを読者や視聴者がますます身近なものに受け止める現象が観察されている。読者は、報じられる事件の継続性に興味をもつのではなく、その事件が起こっている時点で重複して取り上げられる現況を伝える同時性に引き付けられ、近いものと受け止めるのだ。

次に②として、本能 (Les grands instincts) が来ている。生きている人間として存在している限り、衝動的に引付けられる事象は少なくない。愛憎、生死、暴力、事件、犯罪とその結末、等々への本能が関わる距離感である。

地理 (La géographie) が③として掲げられているが、個々の人々にとっては現に住んでいる場所だけではなく、故郷をはじめとして様々な心理的にかかわりのある場所があり、その遠近的な要素が近接性に影響している。この地理の要素が②の本能と相まって、先に触れた「距離的死の法則 (la loi du mort-kilométrique)<sup>(14)</sup>」とも呼ばれる現象を起こしたりする。エルサレムやクリミア半島のように、物理的な距離感だけでは測り得ない歴史や宗教が重層的な深さを秘めた場所に思いを致せば、地理という要素がメディアにとって複雑な近接性をもたらしていることが理解できよう。

続いて④に挙げられた社会的・職業的集団 (Le groupe socio-professionnel) は、個々人の興味をそそるだけでなく、個々人の職業やキャリア、人生にかかわってくる情報をカバーする分野だ。メディアによるサービスの必要性を感じさせる要因となっている。

次の⑤社会的・文化的帰属 (L'appartenance socio-culturelle) は、個々人の家庭環境や帰属する社会、文化、宗教、政治、趣味、教養等を通じてメディアとのかかわりを方向付け、距離感を醸成する。ピエール・ブルデューは、ジャン＝クロード・パスロン (Jean-Claude Passeron) との共著、『遺産相続者たち (Les Héritiers)<sup>(15)</sup>』の中で、教員、弁護士、管理職、ジャーナリスト等の社会的エリートの子弟が学校教育で成功する理由として、その家庭でのメディア環境を取り上げている。ブルデューは、後に文化資本を通じて世代間に継承され、文化的再生産が行われる様相を描いている。

最後に⑥として日常生活 (La vie quotidienne) が挙げられている。日々の家庭生活にかかわる家事労働から何気ない仕草、習慣、行動、茶飯事、車、学校、等々への関心は高い。

普段の習慣や癖についてはアビチュードゥ (habitude) という庶民の使うフランス語がある。にもかかわらず、わざわざラテン語で習慣/習癖を表す habitus (アビトゥス/ハビトゥス) をブルデューが持ち出したのも、日常的あるいは慣習的な行為を遡って鳥瞰的に体系化したかったからであろう。日常生活が情報への近接性に与える影響は大きい。

以上、アニェスがジャーナリズム教本 (Manuel de journalisme) で「近接性の法則」を測る6つの尺度を見た。

アニェスは、この「近接性の法則」の解説に続けて、「読みやすい新聞 (un journal facile à lire)<sup>(16)</sup>」、「読者の信頼を保持する (Garder la confiance de ses lecteurs)<sup>(17)</sup>」、「読者の声を聞く (À l'écoute des lecteurs)<sup>(18)</sup>」と新聞記事作成と新聞編集に焦点を絞った記述を続けている。読者に寄り添った新聞づくりに腐心して来た彼らしい構成のマニュアルである。アニェスの教本はフランスの殆どのジャーナリズム高等学校で基本的な教科書として採用されているだけでなく、フランス語圏のジャーナリズム教育で広く用いられている。

とは言え、個々人としてのエゴを中心に置いて、そのエゴに近接する情報を高く評価することは、結果的に大衆迎合につながるのではないかと、その経験則の教育上の意義に疑問を呈する向きも少なくない。社会的文脈から切り離して、エゴの心理学的側面を過度に強調することにつながるのではないかとしたクリティアヌ・レスティエ＝メルレイ (Christiane Restier-Melleray)<sup>(19)</sup>の懸念は、社会心理学の研究成果に鑑みれば良く理解できる。一方、多様なエゴである読者や視聴者を想定しながら、そのようなエゴに情報をどう伝えるかを学ぶきっかけにしようとするジャーナリズム教育の立場から見れば、伝える側のジャーナリスト、ないしはジャーナリストの卵やヒヨコに最適な視点の置き所を模索してもらうように指導するところが肝心なのだろう。

#### 4、「近接性の法則」とその逆説的効果 ～新聞の信頼性への期待に見る～

クリティアヌ・レスティエ＝メルレイが想定するような、社会的文脈から切り離された孤立した個人としてのエゴをターゲットとして、「近接性の法則」を文字どおりにビジネスとして活用しているメディアは、新聞よりも、むしろ他の情報メディアである。メールや検索情報を分析し、GPS等を駆使しながら、利用者、個人個人の近接での情報サービスを徹底貫徹し提供するヤフー、グーグル等々のネット・メディアは伝達速度の面とコスト・パフォーマンスの面でも圧倒している。メディアを流れるコンテンツに対しては、広告宣伝も含め、限りなく無色透明に近い情報サービスが、ネット・ニュートラリティー (Net Neutrality) の原則を踏まえながら提供されている(と事業者は主張している)。フェイスブックを通じて拡散されるフェイク・ニュースが問題視されるような事例にあっても、メディアとしてのフェイスブック自体の問題であるよりも、フェイク・ニュースを発信させる側の問題として解決の方法を考えることが望ましかろう。

インターネットが、利用者に最も身近な場で、その近辺の情報をグローバルに提供するようになって以来、まだ二十数年に満たない。量的にも情報の伸びを推進しながら、質的な面でも上昇を続け、そこを流れる情報を信頼するものが2015年には30%程度にまで高まっていた。しかし、2018年には25%と、インターネットが一般に普及し始めた二十数年前の水準まで急落してしまった。フェイク・ニュースの蔓延が大きな理由であろうが、皮肉なことに、そのインターネット上で最も信頼維持に貢献し利用されているのが新聞社のサイトから提供される情報なのだ。ネット利用者の38%が、関心を抱いた短信ニュースについては、その詳報を得るために新聞社のウェブサイトにアクセスしているのだ。インターネット上を流れる様々な情報の裏付けを取るために、新聞社が頼られているのである。

新聞の信頼性は52%とラジオの56%に次ぐ高さとなっている。ここで新聞の信頼性は52%という数字を示したが、これはアンケート回答者全体に対するもので、紙メディアとしての新聞を購読している層に限定すると、信頼性は60%にまで上昇する。

「近接性の法則」が文字どおりの意味で適用できるのはインターネットに限定され、新聞メディアについては逆説的な意味で「近接性の法則」に多少の配慮するにしても、読者の信頼に応えることに力点を置く必要があるようだ。

ここで参照している数値は、フランスのカトリック系新聞であるラ・クロワ紙 (La Croix) が主体となって31年前から毎年実施している「フランス・メディア信頼度調査 (La confiance des Français dans les médias)」の報告に基づくものである。

この調査では、「メディアに最も期待することは何ですか？」との設問も加えられていたが、90%もの回答が「信頼でき、検証された情報を提供する」ことに寄せられている。一方、「解決策を提示する」には6%、「政党の選択肢を提案する」には2%の期待に留まった<sup>(22)</sup>。

同時に、メディア騒音度数 (L'unité de bruit médiatique ; UBM)<sup>(23)</sup> を用いて、昨年 (2017年) 中に伝統的メディアやデジタル・メディアが取り上げたニュース、あるいはフランス国民の間で話題となったものの中から、情報提供量が適切であったか、過剰と見做されたかの調査も行っている。

メディアが騒ぎ過ぎたと見做されたワースト記録第1位は、ネイマール選手のパリ・サンジェルマンFC移籍の話で67%であった。第2位はフランソワ・フィヨン元首相の不正報酬疑惑事件で57%、第3位が歌手ジョニー・アリディ逝去のニュースで56%が過剰との判断であった。ちなみに、これらの3つの話題で、騒音度数そのものの数値が高かったのはジョニー・アリディ逝去の3853UBM、フランソワ・フィヨン事件は1534UBM、ネイマール移籍は863UBMであった。

逆に、メディアの取り上げた件数や量が適切であったと高い評価を得たのは、ハリケーン・イルマがアンティル諸島を直撃したニュースが69%で第1位、23名の犠牲者を出したマンチェスター事件が60%の第2位、第3位が55%のシモーヌ・ヴェイユ女史逝去であった。

メディアの関心が不十分で、もっと話題として取り上げてもらいたかったとの不満が多かったのは、第1位が労働法政令の関連で51%、第2位がドイツ連邦議会選挙で極右政党「ドイツのための選択肢 (AfD)」が94議席を獲得したニュースで37%が不満を示した。第3位は35%の同率で2件が並んだが、一方は米国のパリ協定離脱 (1154UBM) で、他方は除草剤グリホサート禁止の是非 (454UBM) を巡るものであった。

悪評であれ、好評であれ、いずれにおいても3位までにリストアップされなかったニュースの中で注目されるのは、マクロン大統領の選出、#MeToo、フランシスコ・ローマ法王のビルマ (ミャンマー) およびバングラデシュ歴訪とロヒンギャ難民にかかわる数値である。マクロン大統領のメディア露出は高く2706UBMであったが、話題として過剰とするもの43%、適切とするもの48%で拮抗していた。ローマ法王の歴訪に関しては、適切とするものが34%に対して、もっと取り上げるべきとの意見が28%で、歴訪先が旧英国領で遠隔地にもかかわらず関心は高かったことが示されている。<sup>(24)</sup> #MeToo運動に関しては、524UBMでマクロン選出の5分の1程度の数値に留ま<sup>(25)</sup>っており、もっと話題にして欲しいとの意見が10%、適切であったが29%、過剰が21%である一方、解らないが37%とフランスにしては異常な高さを示し、意見なしが3%で、まだまだテーマとしての理解が十分には浸透していない様相が伺える。

このような調査結果を見ると、読者層や視聴者の反応や期待も複雑かつ多様で、決して自分やエゴに地理的に近いとか、近隣、近接する情報を高く評価している訳ではないことが理解できよう。「近接性の法則」を解釈する時にも、留意してかからないといけないと思われる。特に、情報を提



供する側に立つジャーナリストの場合は、「近接性の法則」を超克するためにも、自分の持ち場の立ち位置、視座を見定めることが重要になってくる。

逆説的な話になるが、読者や視聴者は様々で、遠近感の捉え方も複雑ではあるが、そんな壁を乗り越えて、ジャーナリストの本分である聞いて伝えることに徹しなさい、ということであろう。

「近接性の法則」の壁をジャーナリストはどのように乗り越えているのか。報道のプロフェッショナルとして、読者や視聴者から遠くにありながら報道に従事している特派員の報告から次に考察してみたい。

### 5、「近接性の法則」の壁を越えて ～特派員報告から～

今年（2018年）11月は、いつになく、日仏間のニュースで賑わった。金融商品取引法違反の容疑で羽田空港到着早々に逮捕されたカルロス・ゴーン氏と日産・ルノー（Renault-Nissan）の提携・資本関係、11月23日パリで開催された博覧会国際事務局（Bureau International des Expositions；BIE）総会における2025年大阪万博の決定、と話題に尽きなかった。

しかし、国際的には大切な式典としてニュースにも大きく取り上げられたにもかかわらず、日本では殆んど注目されなかった出来事があった。100年前の1918年11月11日、パリから北北東81キロ・メートルにあるコンピエーニュの森（La forêt de Compiègne）でドイツと連合国の間に休戦協定が締結された。同盟国側と連合国側の双方で1600万人以上の犠牲者を出した凄惨な戦争がようやく休戦となった日から100周年を迎えたことを記念する式典が開催されたのだ。2018年11月11日、まさに100年前のドイツ代表の心情を彷彿とさせるような冷たい雨の降り注ぐ中、パリに約80の国々や国際機関のトップが参集した。

敵／味方、勝者／敗者の相克が残り、東欧、中欧、中近東、アフリカをはじめとして、未だ第1次世界大戦の負の遺産と苦闘する人々も多い中での100周年である。祝う気にもなれない国々も招請しながら、<sup>(26)</sup>遅れ気味だったプーチン大統領、早々に移動したトランプ大統領も含め、世界各国の多くの元首を参集させた背景には何があったのだろうか？ 戦闘を終結させるという目的の一つに絞られた休戦100周年であったからこそであると推察される。利害が明確に分かれるヴェルサイユ条約などでは、こうは行かない。「こんな惨劇は絶対に起こさせない（plus jamais ça）」という平和を祈ることで一致できる筈と、敵／味方、加害国／被害国を問わず各国元首が集っての記念式典となったのであろう。<sup>(27)</sup>

同時に、100年前の時間軸を遡り、他国の側の視点に立つと違って見えることもあると、敢えて「近接性の法則」の壁を越えて報道に従事するフランスのジャーナリズムの視座に確固たるものがあることを伺える絶好の機会となった。

偏狭なナショナリズムの萌芽を排し、国際協調を擁護する立場を明示したメルケル首相は今回の記念行事を成功させた立役者でもある。<sup>(28)</sup>しかし、パリのエトワール広場にある無名戦士の墓にドイツの首相が初めて献灯したのは2009年になってのことで、サルコジ大統領に案内されたメルケル首相であった。当時の訪問もドイツでは不評を買ったが、今回が2度目の献灯となったメルケル首相にとって、不人気覚悟の勇氣ある行動だったと思われる。ドイツの歴史から見れば休戦の日は、むしろ「トラウマの日」<sup>(29)</sup>で、ドイツ人ならば皆が忘れた日である、とル・モンド紙のベルリン特派員は伝えている。<sup>(30)</sup>ドイツ帝国のヴィルヘルム2世は休戦協定締結の前々日となった1918年11月

9日に独断で退位を宣言、10日早朝には帝室資産を満載した特別列車でオランダへ亡命してしまったのだ。ドイツでは、ドイツ帝国終焉と、来るべきヴァイマル共和国が始まる前の屈辱と苦難にみちた空白期であった記憶が強いようだ。<sup>(31)</sup>

フィガロ紙も、<sup>(32)</sup>ドイツでは、1918年11月はドイツ帝国の終焉、ヴァイマル共和国の始まりであると捉えられていることを伝えている。第1次と第2次の二つの世界大戦を連結して考えており、フランスのように前者のみを大戦 (la Grande Guerre) と呼ぶことはないし、ましてやこれを祝賀することはないとしている。

起こらなかったこと、無かったことは、一般的にはニュースにならないが、今回の式典では、例外ともなるベルリン発のニュースがあった。「マクロンの決定は良い決定」<sup>(33)</sup>との見出しの記事だ。この見出しにある決定とは、今回の式典で軍事パレードは行わないとの決定である。戦争の敗者、弱者への配慮が優先されたからだ。その代わりに開催されたのが平和フォーラム (Forum de la paix)<sup>(34)</sup>である。

ちなみに、ドイツの国民哀悼の日 (Volkstrauertag) は、戦没者とナチの犠牲者を追悼する記念日で、1993年以来、毎年11月の第3日曜日に挙行されており、今年 (2018) 11月18日の式典にメルケル首相と並んでマクロン大統領も出席した。<sup>(35)</sup>

「中近東は、第1次世界大戦の戦禍を最も受け続けている地域である」と、8千字にも上ろうという記事を掲載したのは11月1日付けのル・モンド紙<sup>(36)</sup>である。オスマン帝国解体の歴史を辿り、今日の状況を詳報している。1918年10月30日、ムドロス港に停泊中のイギリス戦艦アガメムノン号の艦上で、オスマン帝国と連合国との休戦協定が締結され戦闘は終了した筈なのに、2週間後にはイスタンブールが連合軍に占領され、以後、オスマン帝国の分割占領は進められ、<sup>(37)</sup>今なお往時の後遺症が残っている。<sup>(38)</sup>民族や国境の問題で西側メディアから批判されることが少ないトルコや中近東の国々である。しかし、根源的な原因を残して行った側のメディアとして、その報道姿勢に歴史的責任を感じなければいけない内容となっている。

同紙は続けて、大戦の結果、トリアノン条約により国土の70%を失ったハンガリーについてもブダペスト特派員の手で詳述、<sup>(39)</sup>中欧から東欧にかけての民族や国境の問題の複雑な現況を伝えた。マジャール民族の誇りと伝統が建設的なヨーロッパの未来に役立つことを期待させる記事であった。

マクロンの演説に先立ち、各国首脳の前で、フォン族の父とヨルバ族の母の間に生まれたベナンの歌手アンジェリク・キジョー (Angélique Kidjo)<sup>(40)</sup>が3万人の戦死者を出したセネガルの狙撃兵に捧げられたBlewuを歌い上げ、感動を呼んだ。“Blewu”とはミナ語で、「辛抱」とか「穏やかに」を意味する題名だそうで、フランス本国で戦った植民地からの兵に捧げられた歌という。<sup>(41)</sup>

アフリカや南太平洋から大戦に参加して犠牲になった人々、その後遺症がのこった地域からの報告も多かった。<sup>(42)</sup>ニューカレドニア (Nouvelle-Calédonie)<sup>(43)</sup>の独立是非を問う住民投票が2018年11月4日に実施されたこともあり、フランスの植民地行政の反省を含めた報道も活発であった。大戦中、フランス国旗の下に戦った兵士は、サハラ以南から18万人、マダガスカルから4万人を数えたという。工場の労働者としても、アルジェリアから10万人、モロッコから4万人が本国の軍需産業に徴用されていたことを報じている。<sup>(44)</sup>

「大戦から忘れられた・・・忘れがちな日本 (Le Japon, oublié... et oubliés de la Grande Guerre)」<sup>(45)</sup>との11月21日付けル・モンド紙の記事は、東京駐在フィリップ・ポンス (Philippe

Pons) 特派員によるものである。

日本では、休戦協定 100 周年は殆ど気付かれることもないまま終わってしまったがと、日本の第 1 次世界大戦以後の動きを優しく記している。国際連盟憲章の策定に際し、人種平等の原則を日本が提案したにもかかわらず、米国の現状維持政策に阻まれた日本の屈辱感が書かれている。年末にベートーヴェンの第 9 交響曲が好んで演奏される背景には、1918 年に四国（徳島県の板東俘虜収容所）でドイツ兵捕虜が演奏したことに始まり、第 2 次大戦中に人種差別なく受け入れたヨーゼフ・ローゼンシュトック指揮による新交響楽団のラジオ放送があることを紹介している。フランス語圏の読者を引き込ませる書き振りで、休戦協定 100 周年の機会を外しては興覚めさせてしまうかも知れない日本の歴史的背景を巧みに伝えている。

余談になるが、大戦初期の段階から連合国側に立った日本はドイツを撃破、独蘭電信会社（Deutsch-Niederländische Telegraphengesellschaft）が太平洋のヤップ島（Insel Jap）から中国に向け展開していた海底ケーブル網を管理下に収めた。犠牲者を余り出さないまま、当時は味方であった英国の帝国海底ケーブル網（All Red）と対抗できる可能性（あるいは、できるかの錯覚）を掌中<sup>しうちゅう</sup>に収めたのだ。大国への道を駆け上る踏み台にもなった第 1 次世界大戦から、この時の敵国であったドイツと組み直して第 2 次世界大戦へと突入した日本の歴史を振り返る意味でも重要な休戦記念日であった筈だが、余り当事者意識が湧かなかつたのかも知れない。

特派員にとって、派遣された持ち場での自分の立ち位置、視座を見定めることはかなり難しい。「近接性の法則」を短絡的に当て嵌めて捉えると、仕事へのモチベーションが下がってしまうこともありえる。また、現地や現場にいるからと言って状況が容易に把握できるわけでもない。取材する段階だけに限って見ても、自分の身体がその場にあるからと言って、周囲の状況を明確に把握できるとは限らない<sup>(46)</sup>。天安門事件に立ち会った記者が都市部の動きには敏感であり得ても、逆に農村部の不動性には鈍い反応を示してしまったり、あるいはモスクワ駐在特派員がソ連解体のインパクトを軽視してしまったりといった例を引くまでもないだろう。

現在進行中の話であるが、カルロス・ゴーン氏逮捕を巡ってのニュースを追っていても、日仏相互の特派員報告とそれぞれの本国の記者の手になる記事を比較すると「近接性の法則」が微妙にインパクトを与えていることが興味深い。

「近接性の法則」を逆説的に捉えて、鳥瞰的に、あるいは逆に最も底辺にまで下りたフィールドから見上げ直してみることも必要になって来る。しかし、より高い意欲と身近で精緻な観察眼で生き生きとしたレポートができる可能性もあるからこそ、職務としての特派員の魅力もあるのだろう。他の記者、専門家との交流やバランス感覚も重要で、記者や編集者の視座の置き場所、視点の設定の方法が大切になって来るのだと思われる。

## 6、「近接性の法則」と視座の設定 ～いちばん下から見てみよう～

「近接性の法則」にいう情報の受け手にとっての「近くに」の感覚は複雑であり、その効果には逆説的な面もあることが推測できる。また、受け手がメディアに最も期待するところは情報の信頼性であることも見た。

このような状況のなかで、どのような視座から情報を送れば良いのだろうか。

「現場テランに立って、地元の人々の声パロールを受け入れ、いちばん下から見てとれることに注意深くあること (à être présents sur le “terrain”, à accueillir la “parole” de ceux qu’ils représentent, à être attentifs à ce qui se voit d’en bas)」が望まれるとの意見を、署名なしで掲載したのは1993年2月26日付けのル・モンド紙(47)である。(48)いわゆる普通の人々の日常的な心配事や困難の近くに寄り添うことが政治家には必要で、統計や委員会報告などの官僚的仲介物メディアッションで解ったつもりになるのはいけないとの意見が述べられている。この意見の対象は政治家になっているが、ジャーナリストや学者としての自らへの願いでもある。執筆者については、名を伏せたまま掲載されたのであるが、実は当時72歳になっていたジョルジュ・バランディエ (Georges Balandier)(49)が書いたものだという。

下から見たり見上げたりしてみても、また近くにいっても洞察力の発揮が保障される訳でもない。(50)しかし最善の努力をすることの積み重ねが体感的能力となって、真実に接し、慧眼を開くことへの期待は失われてはいけないと思われる。

日本においても、往時のサツ回りや新入社員の現場経験も、いちばん下から見るからこそ識別し体感できることがあった筈である。赴任当初は意気揚々の反面、不満や葛藤に満ちていた時間も、その現場に塩漬けになる(してもらえる)こともなく、次々と職場を移るに従って蓄積される現場経験が体感となって後に生かされていたように感じられる。本人次第ではあるが、将来にわたって生かされる、長い目で見てこそ意義のある機会となっていたのではないだろうか。

「現場テランに立って、地元の人々の声パロールを受け入れ、いちばん下から見てとれることに注意深くあること…」を、組織的に実践していたのが日本の既存メディアの素晴らしさである。その強したかで逞しい生命力の根源はここにあるものと思われる。その初心を忘れず、官僚的仲介物化してしまうことを敢然と拒否する矜持こそ未来を拓くのだと思われる。

誰でも自分の言葉で発信でき、メディアの介在も必要でないようにも考えられる時代ではあるが、真贋錯綜したまま横溢する情報に溺れそうな時代でもある。そのような時代であればこそ、ネット上で最も頼られているのが既存のメディア、特に新聞社のサイトである。その高い信頼性を支え生かすためにも、「近接性の法則」の制約を乗り越え、その逆説的な意味での教訓を生かせるジャーナリストが育てられ、活躍することが望まれる。(2018年11月29日脱稿)

## 注

なお、脚注に付したウェブ等の参照日時は、特に記載の無い限り、2018年11月29日18:45 JST 現在のものである。

- (1) la Conférence nationale des métiers du journalisme  
<http://www.cnmj.fr/basedocumentaire/ecoles-journalisme-reconnues/>
- (2) <https://www.larousse.fr/dictionnaires/francais/proximit%C3%A9/64681>
- (3) パリ政治学院の政治研究センター (Le Centre de recherches politiques de Sciences Po) は、2003年に組織再編改称を行っているが、改組後も以前のフランス政治生活研究センター (anciennement Centre d'études de la vie politique française ; CEVIPOF) の略称をそのまま継承して用い続けている。
- (4) Le baromètre de la confiance politique  
<http://www.sciencespo.fr/cevipof/fr/content/le-barometre-de-la-confiance-politique>
- (5) パリ政治学院 (SciencePo) が2017年12月13日~26日にかけて行った、「プロクシミテ (proximité)

と感ずる地理的範囲はどこですか」との調査を、「あなたが帰属していると最も感ずる地理的範囲はどれですか？ 次の5つの選択肢の中から、一つだけを選んで下さい。①住んでいる地域、町、カントン、②県、州、地方、③フランス、④ヨーロッパ、⑤全世界、のいずれですか？」と質問で行った。18歳以上のフランス投票名簿から無作為抽出した2200名に行い、2084名からの有効回答を得、その結果を2018年1月に公表している。この結果は下記のとおりであった。

①住んでいる地域、町、カントン (La ville, la localit , le canton o  vous habitez) 21%

②県、州、地方 (La r gion, la province, le d partement) 17%

③フランス (La France) 40%

④ヨーロッパ (L'Europe) 7%

⑤全世界 (Le monde entier) 12%

わからない (NSP/ne sait pas) 3%

Sentiment de proximit  avec les diff rentes unit s g ographiques

Parmi les unit s g ographiques suivantes,   laquelle avez-vous le sentiment d'appartenir avant tout ?

[https://www.sciencespo.fr/cevipof/sites/sciencespo.fr.cevipof/files/Barometre\\_confiance\\_vague9.pdf](https://www.sciencespo.fr/cevipof/sites/sciencespo.fr.cevipof/files/Barometre_confiance_vague9.pdf), p.85.

(6) [https://abonnes.lemonde.fr/pixels/article/2018/10/31/le-new-york-times-decide-de-publier-des-photos-d-enfants-mourant-de-faim-au-yemen\\_5376830\\_4408996.html](https://abonnes.lemonde.fr/pixels/article/2018/10/31/le-new-york-times-decide-de-publier-des-photos-d-enfants-mourant-de-faim-au-yemen_5376830_4408996.html)

<https://www.nytimes.com/interactive/2018/10/26/world/middleeast/saudi-arabia-war-yemen.html?activation=click&module=RelatedLinks&pgtype=Article&mtrref=t.co>

(7) cf. le Centre pour l' ducation aux m dias et   information (CLEMI)

<https://www.cleml.fr/>

(8) <https://education.francetv.fr/matiere/education-aux-medias/cinquieme/video/la-loi-de-proximite>

中学生にメディアを理解させる番組、「メディアの鍵 (Les cl s des m dias)」シリーズの一環として2015年に制作されている。脚本はブリュノ・デュヴィック (Bruno Ducic) である。En partenariat avec La G n rale de production, co- production de la France T l vision, pour la francetv  ducation, France Inter et le R seau Canop . Avec le soutien du Minist re  ducation nationale - Direction du num rique pour l' ducation. Avec le soutien du collectif Enjeux e-m dias. 2015.

(9) ちなみに、ここで「カメル君に与する」と中学生には難しいかも知れない「与する」との表現を使ったが、コミットする、あるいは味方になるような意味である。このように主体性が明確な意見を輿論、人気のあるバンドワゴン (band-wagon/楽隊車) に乗るような意見が輿論、世の中の広汎な意見が世論である。

(10) フランス国際ラジオ放送 (Radio France Internationale ;RFI) での新人教育でも同様の教材が用いられていた。

<http://www.rfi.fr/>

Yves Agn s ; Manuel de journalisme -.  crire pour le journal, La D couverte, 2002, Paris, 448pp., p.37.

(11) Frances Cairncross ; The Death of Distance, Harvard Business Review Press, Revised edition, 2001, 320pp.

(12) Ibid. (Yves Agn s ; Manuel de journalisme -.  crire pour le journal, La D couverte, 2002, Paris, 448pp.), pp.36-39.

同書は2002年第2四半期に初版が出され、「Écrire pour le journal (新聞のために書く)」との副題が添えられていた。2008年8月に第2版が出された時点で副題が消されたが、2015年8月に第3版(480頁)が出版されたことに伴い、書名の副題はÉcrire pour le journalから「書かれたものとデジタル (L'écrit et le numérique)」に改定された。本稿では、特に断りのない限り、2002年の初版に準拠して記述を進める。

- (13) Pierre Bourdieu ; Sur la télévision suivi de L'emprise du journalisme, Raisons d'agir, Le Seuil, Paris, 1996, pp.22-29.
- (14) アニエスは、これを「キロメートル的死の法則 la "loi du mort kilomètre"」と呼んでいる。  
Yves Agnès ; *op. cit.* p.38.
- (15) Pierre Bourdieu et Jean-Claude Passeron ; Les Héritiers : les étudiants et la culture *in* coll. « Grands documents » (n° 18), Les Editions de Minuit, Paris, 1964, p. 20. (戸田清訳 ; 遺産相続者たち—学生と文化、藤原書店、1997、229pp.)
- (16) Yves Agnès ; *op. cit.* pp.39-40.
- (17) Yves Agnès ; *op. cit.* pp.40-42.
- (18) Yves Agnès ; *op. cit.* pp.42-46.
- (19) Christiane Restier-Melleray : La proximité dans les médias : retour sur une « loi », *in* La proximité en politique (dir. Christian Le Bart / Rémi Lefebvre ), Presses universitaires de Rennes, Rennes, 2005, 308 pp., pp. 251-270.
- (20) *cf.* <https://www.wired.co.uk/article/facebook-tackles-fake-news>
- (21) La Croix, Kantar Sofres & Kantar Media ; Baromètre 2018 de la confiance des Français dans les media, janvier 2018.  
<https://www.meta-media.fr/2018/01/23/entre-crise-de-confiance-et-perte-de-reperes-linteret-pour-linformation-est-au-plus-bas.html>  
<https://cms.edelman.com/sites/default/files/2018-01/2018%20Edelman%20Trust%20Barometer%20Global%20Report.pdf>
- (22) <https://www.franceinter.fr/societe/barometre-de-la-confiance-dans-les-medias-les-francais-moins-friends-d-actu-mais-plus-exigeants>
- (23) 「メディア騒音度数 (L'unité de bruit médiatique ; UBM)」は、オン・ライン、オフ・ラインを問わず、旧来のメディアおよびデジタル・メディアから発出される情報を騒音 / 雑音 / ノイズ (bruit) として捉えることにより、利用者が本人の意思の有無に関係なく、メディア情報に晒されている情報量を計測してみようと試行されている単位である。基本単位である1UBMは、当該地理的範囲(例えば日本とか、フランス)の15歳以上の総人口の1%が、一日当たり、1件の話題に晒されている場合に相当する。
- (24) “Massacre en Birmanie… Au diable la Loi de proximité, les médias n'informent pas !” との見出しで、ビルマでの虐殺が、近接性の法則に従って、メディアが報道しないとの意見が2014年4月に見受けられたこともある。  
<http://www.indigne-du-canape.com/massacre-en-birmanie-au-diable-la-loi-de-proximite-les-medias-ninforment-pas/>
- (25) “#BalanceTonPorc” も含む。

- (26) [https://www.lemonde.fr/centenaire-14-18/article/2018/11/11/centenaire-du-11-novembre-la-demande-de-memoire-et-d-histoire-vient-des-francais\\_5381971\\_3448834.html](https://www.lemonde.fr/centenaire-14-18/article/2018/11/11/centenaire-du-11-novembre-la-demande-de-memoire-et-d-histoire-vient-des-francais_5381971_3448834.html)
- (27) <http://www.elysee.fr/declarations/article/transcription-du-discours-du-president-de-la-republique-lors-de-la-commemoration-du-centenaire-de-l-armistice/>
- (28) Marc Semo ; Centenaire 11-Novembre : face à Trump, Macron et Merkel jouent la carte de l'unité, *in* Le Monde, le 12 novembre 2018.  
[https://www.lemonde.fr/international/article/2018/11/12/centenaire-11-novembre-face-a-trump-macron-et-merkel-jouent-la-carte-de-l-unite\\_5382190\\_3210.html?xtmc=macron\\_patriotisme\\_nationalisme&xtcr=5](https://www.lemonde.fr/international/article/2018/11/12/centenaire-11-novembre-face-a-trump-macron-et-merkel-jouent-la-carte-de-l-unite_5382190_3210.html?xtmc=macron_patriotisme_nationalisme&xtcr=5)
- (29) « Le 11 novembre 1918 est une date traumatique dans l'histoire de l'Allemagne. C'est pourquoi, dès le début, tout le monde a voulu l'oublier », analyse Arndt Weinrich, chercheur à la Sorbonne et coauteur de *La Longue Mémoire de la Grande Guerre* (Presses universitaires du Septentrion, 2017).  
Thomas Wieder (Berlin, correspondant) ; En Allemagne, l'impossible anniversaire du 11- Novembre, *in* Le Monde, le 01 novembre 2018.  
[https://www.lemonde.fr/idees/article/2018/11/01/en-allemande-l-impossible-anniversaire\\_5377626\\_3232.html](https://www.lemonde.fr/idees/article/2018/11/01/en-allemande-l-impossible-anniversaire_5377626_3232.html)
- (30) *ibid.*
- (31) Lætitia Béraud ; En Allemagne, à défaut de 11-Novembre on commémore la révolution de 1918, *in* Le Monde, le 04 novembre 2018.  
[https://www.lemonde.fr/centenaire-14-18/article/2018/11/04/en-allemande-a-defaut-de-11-novembre-on-commemore-la-revolution-de-1918\\_5378679\\_3448834.html](https://www.lemonde.fr/centenaire-14-18/article/2018/11/04/en-allemande-a-defaut-de-11-novembre-on-commemore-la-revolution-de-1918_5378679_3448834.html)
- (32) Laura Andrieu ; Centenaire du 11 novembre : la difficile commémoration allemande *in* Le Figaro, le 09 novembre 2018.  
<http://www.lefigaro.fr/international/2018/11/09/01003-20181109ARTFIG00274-centenaire-du-11-novembre-la-difficile-commemoration-allemande.php>
- (33) Claire Demesmay, Barbara Kunz ; 11-Novembre : « La décision d'Emmanuel Macron est la bonne », *in* Le Monde, le 07 novembre 2018.  
Par Claire Demesmay et Barbara Kunz Publié le 07 novembre 2018 à 05h15 - Mis à jour le 07 novembre 2018
- (34) [https://www.lemonde.fr/politique/article/2018/11/11/forum-de-la-paix-macron-et-merkel-mettent-en-garde-contre-le-nationalisme\\_5382097\\_823448.html](https://www.lemonde.fr/politique/article/2018/11/11/forum-de-la-paix-macron-et-merkel-mettent-en-garde-contre-le-nationalisme_5382097_823448.html)
- (35) Treffen mit Merkel: Macron besucht am Volkstrauertag Berlin, 18. November 2018, Die Zeit.  
<https://www.zeit.de/news/2018-11/18/macron-besucht-am-volkstrauertag-berlin-181117-99-858513>
- (36) Antoine Flandrin ; Le Moyen-Orient est la région la plus durablement touchée par la guerre de 1914-1918, *in* Le Monde, le 01 novembre 2018.  
[https://www.lemonde.fr/idees/article/2018/11/01/le-moyen-orient-est-la-region-la-plus-durablement-touchee\\_5377655\\_3232.html?xtmc=rogan&xtcr=1](https://www.lemonde.fr/idees/article/2018/11/01/le-moyen-orient-est-la-region-la-plus-durablement-touchee_5377655_3232.html?xtmc=rogan&xtcr=1)  
*cf.* Le centenaire oublié de 1918 au Moyen-Orient

<http://filiu.blog.lemonde.fr/2018/11/18/le-centenaire-oublie-de-1918-au-moyen-orient/>

- (37) 1920年8月10日、セーヴル条約 (Traité de Sèvres) が連合王国とオスマン帝国との間に締結されたが、1923年7月24日、ムスタファ・ケマル (Mustafa Kemal) 率いるアンカラ政府と連合王国との間でローザンヌ条約 (Traité de Lausanne) が再締結された。なおムスタファ・ケマルには1934年11月24日、トルコ大国民議会からアタテュルク (Atatürk ; トルコの祖 / 父の意) の姓が贈られている。
- (38) Marc Aymes ; Istanbul, c'est toujours Constantinople, in *Le Monde*, le 11 novembre 2018.  
[https://www.lemonde.fr/idees/article/2018/11/11/istanbul-c-est-toujours-constantinople\\_5381964\\_3232.html](https://www.lemonde.fr/idees/article/2018/11/11/istanbul-c-est-toujours-constantinople_5381964_3232.html)
- (39) Blaise Gauquelin (Budapest, correspondant) ; En Hongrie, le traité de Trianon occupe toujours les esprits, in *Le Monde*, le 01 novembre 2018.  
[https://www.lemonde.fr/idees/article/2018/11/01/en-hongrie-le-traite-de-trianon-occupe-toujours-les-esprits\\_5377651\\_3232.html](https://www.lemonde.fr/idees/article/2018/11/01/en-hongrie-le-traite-de-trianon-occupe-toujours-les-esprits_5377651_3232.html)
- (40) [https://www.lemonde.fr/afrique/article/2017/01/22/angelique-kidjo-j-ai-chante-contre-donald-trump\\_5067040\\_3212.html](https://www.lemonde.fr/afrique/article/2017/01/22/angelique-kidjo-j-ai-chante-contre-donald-trump_5067040_3212.html)
- (41) ÉMOTION avec l'interprétation de Blewu par Angélique Kidjo - Centenaire de l'Armistice de 1918  
 Merci Maman ANGELIQUE KIDJO (Bénin) pour cette reprise de BELLA BELLO (Togo) en langue mina, parlée au Togo, Bénin et au Ghana.  
 "Blewu" est à l'origine une chanson de la chanteuse togolaise Bella Bellow, décédée en 1973 d'un accident de la route. Le titre, qui signifie "Patience" ou "Doucement" en langue mina, rend hommage aux troupes coloniales ayant combattu en France.  
<https://youtu.be/BpABEO2Embs>
- (42) Séverine Kodjo-Grandvaux ; Centenaire du 11-Novembre : l'Afrique, l'autre scène de guerre, in *Le Monde*, le 06 novembre 2018.  
[https://www.lemonde.fr/afrique/article/2018/11/06/centenaire-du-11-novembre-l-afrique-l-autre-scene-de-guerre\\_5379416\\_3212.html](https://www.lemonde.fr/afrique/article/2018/11/06/centenaire-du-11-novembre-l-afrique-l-autre-scene-de-guerre_5379416_3212.html)
- (43) ニューカレドニアからは、ヨーロッパ系 1047 名、カナックの人々 978 名が動員され、戦死が 575 名と記録されている。  
<https://www.ac-noumea.nc/spip.php?article110>
- (44) *ibid.*
- (45) Philippe Pons ; Le Japon, oublié... et oublié de la Grande Guerre, in *Le Monde*, le 21 novembre 2018.
- (46) « la proximité physique n'offre pas à elle seule une garantie de clairvoyance. »  
 Vincent Hugué ; Journaliste « dans la guerre », L'éthique des journalistes, in *Études* 2004/2 (Tome 400), pages 223 à 236.
- (47) « Ils sont régulièrement invités à être présents sur le "terrain", à accueillir la "parole" de ceux qu'ils représentent, à être attentifs à ce qui se voit d'en bas.»  
 Sociétés - Vues d'en bas, in *Le Monde*, le 26 février 1993.  
[https://abonnes.lemonde.fr/archives/article/1993/02/26/societes-vues-d-en-bas\\_3922974\\_1819218](https://abonnes.lemonde.fr/archives/article/1993/02/26/societes-vues-d-en-bas_3922974_1819218).



[html?xtmc=en\\_bas&xtcr=12](http://www.homme-moderne.org/societe/socio/bourdieu/misere/mde0293.html)

<http://www.homme-moderne.org/societe/socio/bourdieu/misere/mde0293.html>

- (48) いちばん下から見ることのメディア戦略としての是非については、エリク・ネヴェー (Érik Neveu) が米欧の動向を比較しながら紹介している。

Érik Neveu: « Vues d'en bas ? » *in* *Sociologie du journalisme* (3e édition), La Découverte, coll. « Repères », Paris, 2009, 128pp, pp.106-107.

- (49) 下から見るのがどんなに大切か、バランディエが気付く切っ掛けとなったアフリカの現場 (terrain) に立ったのは1946年、セネガルでのことだったという。後に、彼が比較して語ったことがある東京の築地市場とダカールの Soumbédioune 魚市場の両市場が、この秋にそれぞれ新市場へ移転した。

[https://www.lepoint.fr/culture/georges-balandier-mon-travail-c-est-un-combat-contre-l-exotisme-08-10-2016-2074491\\_3.php](https://www.lepoint.fr/culture/georges-balandier-mon-travail-c-est-un-combat-contre-l-exotisme-08-10-2016-2074491_3.php)

<https://www.theguardian.com/cities/2018/nov/08/caught-gutted-sold-the-final-days-of-dakar-traditional-fish-market-senegal>

- (50) Vincent Hugué ; op.cit. (Journaliste « dans la guerre », *L'éthique des journalistes*, *in* *Études* 2004/2 (Tome 400), pages 223 à 236)

